別紙様式３

令和元年度　【　学園研究費助成金＜ Ｂ ＞　】研究成果報告書

学部名　文化情報学部

ﾌﾘｶﾞﾅ　ミタ　タカアキ
氏　名　見田　隆鑑

研究期間　令和元年度

研究課題名　地域博物館との連携による文化財の保存と活用に関する研究

研究組織

	氏　　名	学　　部	職　　位
研究代表者	見田　隆鑑	文化情報学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

１．本研究開始の背景や目的等（200 字～300 字程度で記述）

本研究は、大学と地域の博物館が連携して地域の文化財に関する調査を実施し、その成果を社会へ発信するとともに、博物館における展示、教育活動の活性化を目指すものである。博物館にとって所在する地域の文化財の保存・活用をはかることは大切な役割の一つではあるが、特に公立博物館では予算の事情から、調査や撮影を実施することが厳しい状況に置かれているケースがある。本研究を通し、大学側は博物館の仲介のもとで地域の文化財調査に関わる機会を獲得し、その成果を所蔵者や博物館に提供することで、文化財が持つ情報が地域へと還元され、博物館活動の活性化にも役立ててもらうことが可能となるものと考えている。連携をはかる博物館は一宮市博物館で、博物館に隣接する妙興寺の未指定の仏像の調査や仏画等のデジタル化を中心に作業を進めていく。

２．研究の推進方策（300 字程度で記述）

本研究では以下のような方針で研究を進めることとした。

⑴ 学芸員との面談を通し、地域の中で調査対象とする作品や具体的な調査方針を検討する。
⑵ リストアップされた作品について随時実地調査を実施する。調査では寸法をはじめとする作品の情報を記録するとともに、写真撮影も合わせて行う。（大型資料の撮影は外部委託）
⑶ リストアップされた作品の調査が終了したら、その報告書の執筆・編集作業を行う。
⑷ 作品によっては博物館での展示・教育活動に活用できるような方向性を学芸員と検討し、博物館の利用者が地域の文化財についてより理解しやすくなるような二次資料の製作も行う。また、それらの活用に関する評価も受けるようにする。
⑸ 実施後は、大学教員と地域博物館の学芸員が連携した形での文化財調査の意義を振り返る。

３．研究成果の概要（600 字～800 字程度で記述）

本研究では、一宮市博物館と連携し、一宮市にある臨済宗妙心寺派の寺院・妙興寺が所蔵する仏教美術（仏像、仏画）や禅僧の墨跡（掛軸）の調査及びそのデジタル化を実施した。デジタル化を行った具体的な事例には、妙興寺が所蔵する国指定重要文化財「絹本著色仏涅槃図」がある。この作品は、京都・泉涌寺から妙興寺に伝来したことが分かる作品で、全国的にも規模の大きな涅槃図である。令和元年 5 月に 3 日間、一宮市博物館で公開されたが、保存状態から長期間展示することは難しく、またこれまで表装を含めた全体図、本紙の全体図について十分な写真撮影が行われていなかった。懸けて撮影することが難しい作品であることから、今回、下に敷いた状態で天井から撮影することが可能な撮影スタジオに涅槃図自体を輸送し、高精細なデジタル撮影を実施した。このデータは、妙興寺と一宮市博物館に寄贈し、それぞれの場で今後活用できる形にした。今回撮影したデータは、今後、レプリカを製作する場合にも十分に活用できるサイズのものである。また、妙興寺は多数の文化財指定を受けた仏像を所蔵しているが、指定を受けたもの以外にも多くの未調査の仏像を所蔵している。それらの中には重要な作品も含まれることから、それらも実査を行い、基礎的なデータを残しておくことが必要であると考えた。今回は、韋駄天立像、釈迦誕生仏、南無仏太子、布袋像、足利尊氏の母親の念持仏とされる厨子入り観音菩薩立像（髻観音）などを実査し、先の涅槃図と同様に、文化財の撮影を専門に行っているカメラマンに作品を多方向から撮影してもらった。また、一宮市博物館の学芸員より、妙興寺が所蔵する禅僧の墨跡についても、デジタルデータを残しておきたいという要望があり、数点撮影を実施した。涅槃図同様に、仏像と墨跡のデータについても、寺院と博物館に寄贈する形を取った。当初予定した報告書の作成には至ることができなかったが、今後、今回手が回らなかった仏像についても調査・撮影を継続し、妙興寺所蔵の文化財については、まとまった形で紹介する小冊子の作成を目指したいと考えている。

４．キーワード（本研究のキーワードを１項目以上８項目以内で記載）

①文化財	②デジタルアーカイブ	③仏教美術	④地域博物館
⑤仏像	⑥仏画	⑦妙興寺	⑧学芸員

５．研究成果及び今後の展望（公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他○名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。）

本研究の成果について、現状では特に論文、学会発表の形で報告する形には至っていない。本研究を通して得ることができた各文化財の基礎的なデータ、撮影した画像データはすべて所蔵者である妙興寺と一宮市博物館に寄贈した。このデータを元に、今後、館内の展示資料の製作や展覧会図録などの作成に活用されることを期待する。

今後の展望として、地域の文化財調査を進めていく為には、相応の予算の獲得が必要であることを感じている。文化財調査を計画的に実施し、基礎的なデータを所蔵者や周辺の博物館、あるいは行政の担当部署に残すことは非常に大切なことで、自身の他の研究活動の中でも、過去に調査が実施されていても、あるべき場所に基本的なデータが残されていない状況を感じさせらることが多い。少なくとも自身が調査に関わった文化財については、成果を所蔵者や地域に還元し、データに関しては必要とする人が公平に情報を得られる形を作っていきたい。